

思考の柔軟性と良好な人間関係との関連について

—創造的発想のタイプ・グループによる検討—

高野 隆一*・寺澤 美彦**・成田 猛*・久米 稔***

The Co-relation between Flexibility of Ideas and Good Interpersonal Relationships

—An Examination Based on Groupings According to Types of Creative Ideas—

Ryuichi TAKANO*, Yoshihiko TERASAWA**, Takeshi NARITA*,
and Minoru KUME***

It is assumed that creativity—defined as flexibility of ideas—enables not only to solve intellectual problems but also to offer flexible solutions for problems in human relationships. Accordingly, we examined five types of creativity groups among and based on data collected from 323 students, which were judged by results of TCT creativity test, about their co-relation with the indices of good interpersonal relationships, obtained from the four basic positions in interpersonal relationships (self-affirmation, self-denial, affirmation of others and denial of others) measured by TAOK as well as the preference scale for three types of humor (aggressive, playful and supportive) established by Ueno (1992) and Miyato and Ueno (1996). Consequently, more creative types showed significantly higher scores in self-affirmation and affirmation of others than less creative types. With regard to the preference for humor, creative types also demonstrated significantly higher scores for playful and supportive humor than less creative types. These results suggest that more creative types are able to maintain better interpersonal relationships than less creative types.

key words: flexibility of ideas, good interpersonal relationships, basic position in interpersonal relationships, playful humor, supportive humor

問 題

思考の柔軟性とは、ある一つの状況、場面、問題などについて、固定的な見方や考え方にとらわれず、さまざまな角度や観点から考えられることと言えよう。しかし、こうした思考の柔軟性についての

実証的な研究は、例えば、Guilford, J. P. (1959) のように発想の量的な側面に着目したものが多く、発想の質に着目した研究は数少ないのが現状である。久米 (1999) および久米他 (2000) は、発想の量的な側面に着目した研究の問題点を指摘し、思考の柔軟性を与えられた課題の枠組みに拘束されることなく

* 秋田看護福祉大学看護福祉学部社会福祉学科

Department of Social Welfare, Akita University of Nursing and Welfare

** 日本福祉教育専門学校

Japan Welfare Education College

*** 適合性評価研究所

Institute of Competence Assessments

自由に発想できる能力ととらえ、これがいわゆる創造的思考能力、創造性であるとした。この創造的思考や創造性を実証的に研究していくために TCT (Test of Creative Thinking) 創造性検査を作成し、その評価基準についての研究を進めてきた。

現在の評価基準の考え方や現在の評価基準に至るまでのさまざまな問題点の検討については、高野 (1989) によってもなされている。

従来、創造性あるいは創造的思考についての検査、テストは、もっぱら知的な能力の評価、測定のために用いられてきたが、D'Zurilla (1986) は、こうした創造性や創造的思考が、社会的な問題への柔

軟な対応や解決において大変重要であるとし、実践例を示した。

しかし、このような社会的な問題への対応と創造的思考や思考の柔軟性との関連についての実証的な研究は、ほとんど行われていない。高野他 (2002, 2003, 2004) は、柔軟な思考や発想は、社会的な問題の中でも特に大きな位置を占める人間関係における対応の仕方においても重要な役割を果たすものと考え、ここ数年にわたり、思考の柔軟性と良好な人間関係の指標との関連について検討してきた。ここでは、思考の柔軟性と交流分析において良好な人間関係の指標とされる「基本的構え」および人間関係

Table 1 TCT 創造性検査 6 テストの問題内容と制限時間

テスト名	問題内容
1 用途テスト (2分)	次にあげるものは、どんな使い方がありますか。使い方をできるだけたくさんあげてください。 カンヅメのあきカン
2 原因推定テスト (2分)	ひとりの男が椅子に腰掛けて雑誌を読んでいた。その人は突然雑誌を閉じて立ち上がり大急ぎで部屋を出て行きました。 さてどうしたのでしょうか。 どうしたのかを、できるだけたくさん書いてください。
3 標題づけテスト (3分)	あるデパートで手袋のメーカーに 100 ダースの手袋を注文したところ、左手だけの手袋が 100 ダース届いてしまいました。 この話に題をつけるとしたら、どんな題がいいでしょうか。できるだけたくさんあげてください。
4 4点描画テスト (3分)	次にあげた四つの点をつかって、できるだけたくさん絵を描いてください。 (課題の図を Figure 1 に示す。)
5 想像力テスト (2分)	次にあげる図はなんだと思いますか。思いつく物の名まえをできるだけたくさんあげてください。 (課題の図を Figure 2 に示す。)
6 図案発見テスト (2分)	この図形の中にはどんな図案がありますか。みつかるものをできるだけたくさんあげてください。 (課題の図を Figure 3 に示す。)

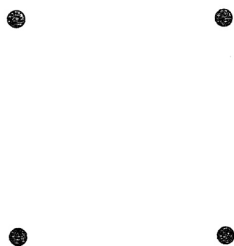


Figure 1 4点描画テスト

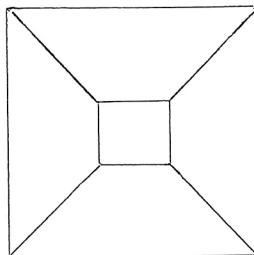


Figure 2 想像力テスト

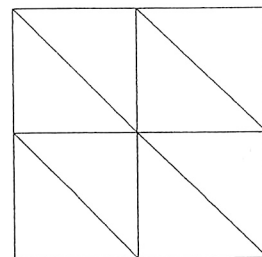


Figure 3 図案発見テスト

を良好に維持していくために重要と考えられる「ユーモアに関する志向」との関連について明らかにしてきた。その結果、より柔軟な考え方ができる者のほうがそうでない者に比して、基本的構えやユーモアについての志向から示唆される良好な人間関係の面で優れていることがわかった。ただ問題は、TCT 創造性検査が 6 下位テストから構成されており、各テストごとに個人の発想タイプを評価し、良好な人間関係に関わる指標との関連を調べるという方法しかできなかったということである。

6 下位テスト全体での評価方法については、これまで検討課題として残されてきたのである。しかし、久米他 (2003) は、6 下位テストをとおしての発想タイプの出現傾向から五つのタイプ・グループに分類する方法を工夫した。この方法により、TCT 創造性検査全体から判断される五つのタイプと良好な人間関係に関わる指標との関連について検討することが可能となった。本稿ではこの方法を用い、研究 I と研究 II に分けて創造的思考に代表される思考の柔軟性と良好な人間関係の指標との関連について明

Table 2-1 TCT 創造性検査 6 テストの設問意図と基本カテゴリーの採点基準および反応例

1 用途テスト	
[設問意図]	カンヅメのあきカンのもつ容器の用途から、どの程度かけ離れた発想ができるかをみるものである。
カテゴリー d	採点基準：カンヅメのあきカンを単なる容器として利用した発想。 反 応 例：物入れ 灰皿
カテゴリー m	採点基準：カンヅメのあきカンのもつ円筒、空洞などの容器的性質に着目した発想。 反 応 例：カンけり 糸電話
カテゴリー o	採点基準：カンヅメのあきカンのもつ円筒、空洞などの容器的性質を無視した発想で、原形はとどめているもの。 反 応 例：鏡 コレクション
カテゴリー e	採点基準：カンヅメのあきカンのもつ円筒、空洞などの容器的発想を無視した発想で原形をとどめていないもの。 反 応 例：ナイフ ブリキ板
2 原因推定テスト	
[設問意図]	課題のエピソードの中の原因の説明されていない行動に対して意外と思える原因をどの程度設定しようかをみようとするものである。
カテゴリー d	採点基準：課題の場面をそのまま受け入れ、何か外的な、もしくは内的な刺激を導入することによって緊急な行動を説明しようとする発想である。 反 応 例：部屋の外で物音がした トイレにいきたくなった
カテゴリー m	採点基準：設定課題の情報を受け入れながら、常識的枠組みを打破し、視点転換を行って課題解決を図ろうとするものである。 反 応 例：雑誌にお金をはさんであった 本にかいてあることにびっくりした
カテゴリー o	採点基準：課題の種々の情報のうち、特定の情報に着目し、不必要な情報を捨象して課題の枠組みの中で解決を図ろうとするものである。 反 応 例：病院で自分の番がきた 電車に乗っていて駅についた
カテゴリー e	採点基準：課題により設定されている枠組みに全く拘束されずに課題解決をはかろうとするものである。 反 応 例：どろぼうと間違えられた 発狂してしまったから
3 標題づけテスト	
[設問意図]	常識的発想を打破して巧みに事件を表現した標題をどの程度作ることができるかをみる。
カテゴリー d	採点基準：エピソードの内容をそのまま受け入れた単なる叙述的発想および事件をまちがいとして捉えてデパート、メーカーに原因を求めたもの。 反 応 例：左手の手袋 100 ダース まちがえられた注文

らかにする。

研究 I

ここでは、TCT 創造性検査結果から導き出される五つのタイプ・グループと四つの基本的構え尺度、そしてユーモア志向尺度のうちの、この時点で筆者らが認知していた攻撃的ユーモア志向尺度と遊戯的ユーモア志向尺度との関連について検討する。

目的

同一被験者に TCT 創造性検査と基本的構えテスト、そしてユーモア志向尺度を実施し、五つのタイプ・グループと基本的構えおよびユーモア志向との関連について調べることを目的とする。

方法

被験者：東北県内の短期大学の看護学科および人間福祉学科の 1, 2 年男女学生合計 269 名。被験者

Table 2-2 TCT 創造性検査 6 テストの設問意図と基本カテゴリーの採点基準および反応例

	カテゴリー m
	採点基準：デパート、メーカーに対する原因追究ではなく、視点転換をして流通上に原因を求めたもの。 また事件を意図的なものとしたり、左手専門のデパート、メーカーを設定し合理化をはかったもの。
	反応例：先に届いた左手手袋 左手デパート
	カテゴリー o
	採点基準：左手袋の用途、利用を主体として視点転換を行った発想。
	反応例：ゴルフ手袋 不足の左手袋を注文した
	カテゴリー e
	採点基準：左手袋の積極的活用を主体として視点転換を行った発想、および課題の枠組みに拘束されない発想。
	反応例：左手専用手袋大出し 21 世紀の手袋
4	4 点描画テスト
	〔設問意図〕 4 点の正方形的特徴にとらわれないで、どの程度かけ離れた発想から描画ができるかをみるもの。
	カテゴリー d
	採点基準：幾何図形的発想、模様、文字、幾何図形など。
	反応例：Figure 4 に示す。
	カテゴリー m
	採点基準：正方形を主体とした発想。
	反応例：Figure 4 に示す。
	カテゴリー o
	採点基準：4 点を絵の要素または要所として利用した発想。
	反応例：Figure 4 に示す。
	カテゴリー e
	採点基準：正方形の性質や 4 点にとらわれない発想。
	反応例：Figure 4 に示す。
5	想像力テスト
	〔設問意図〕 立体視されやすいこの図形から、この図形の制約をどの程度打ち破った発想ができるか、どの程度意外な物体を想像できるか、をみるもの。
	カテゴリー d
	採点基準：立体視の枠にとらわれ、図形上の制約にもかなりしばられている反応。
	反応例：廊下 ピラミッド
	カテゴリー m
	採点基準：立体視の枠から脱し、平面的発想をもつが、図形上の制約にはしばられている反応。
	反応例：皿 封筒
	カテゴリー o
	採点基準：立体視の枠にとらわれながらも図形上の制約を打ち破った反応、または具体的事物を単純化した形態でとらえようとしたデフォルメ的反応。
	反応例：望遠鏡 タイヤ
	カテゴリー e
	採点基準：立体視の枠や図形上の制約から脱した反応。
	反応例：マーク 顔

は、人間関係で悩んだり、問題を抱えやすい青年期にある人たちを対象にしたいと考え、協力依頼することとした。被験者には研究に対する協力は任意であること、個人情報統計的処理を施すので保護されること、また結果については、学会や論文等で発表させていただくことを説明したうえで協力を依頼した。調査は、2000年4月～2003年4月の間に実施した。

検査課題：TCT (Test of Creative Thinking) 創造性検査 久米稔を代表とする早稲田大学創造性研究会が作成したもの。言語性3テスト、非言語性3テストから構成される。言語性テストは、用途テスト、原因推定テスト、標題づけテストの三つ、非言語性テストは、4点描画テスト、想像力テスト、図

案発見テストの三つである。TCT 創造性検査6テストの問題内容と制限時間を Table 1 および Figure 1～3 に示す。また、各テストの反応例と採点のための基本カテゴリーについては、Table 2-1, 2-2, 2-3 および Figure 4～5 に示した。

また、以下に TCT 創造性検査6テスト全体における基本カテゴリー、発想タイプの分類、そしてタイプ・グループの分類基準について示す。

1. 基本カテゴリーによる反応の分類

- d: 課題の常識的枠組みを受け入れた発想。
- m: 課題の枠組みを受け入れながら視点転換を図る発想。
- o: 課題の情報のうち特定の情報に着目し、不必要な情報を捨象した柔軟な発想。

Table 2-3 TCT 創造性検査6テストの設問意図と基本カテゴリーの採点基準および反応例

6 図案発見テスト

〔設問意図〕 いく種類もある図案の中からアンバランスな図案や分離図案がどの程度発見できるかをみようとするとするものである。

カテゴリー d

採点基準：常識的な枠組みに従った発想である。すなわち、バランスがとれていてシンメトリカルな形やバランスがとれていてまとまりのある形（閉合図形）を発想している場合である。

反応例：Figure 5 に示す。

カテゴリー m

採点基準：常識的枠組み（バランス図案およびシンメトリカル図案）を打破し視点転換を行った発想である。アンバランスな形やアンシンメトリカルな形を発想している場合である（ただし、後述の o と e に属するものを除く）。

反応例：Figure 5 に示す。

カテゴリー o

採点基準：刺激図形の中の特定の部分に着目し、不必要な部分を捨象する発想である。すなわち、線と単純図形が接続した形や線のみで構成される形を発想している場合である。

反応例：Figure 5 に示す。

カテゴリー e

採点基準：課題が設定している枠組みを打破した発想である。すなわち、分離図案を発想している場合である。

反応例：Figure 5 に示す。

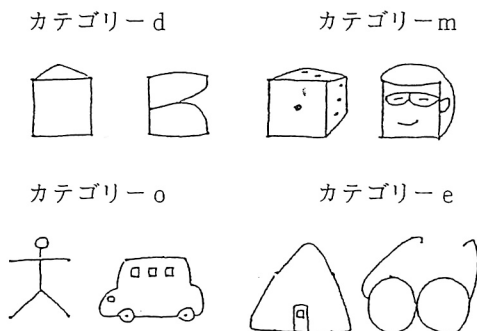


Figure 4 4点描画テストの反応例

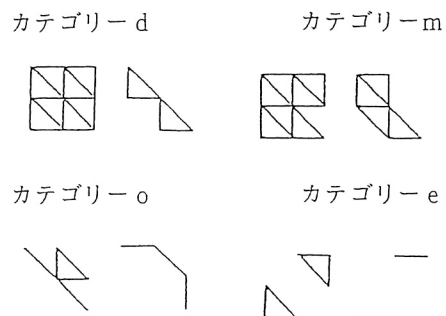


Figure 5 図案発見テストの反応例

e: 課題の枠組みに全くとらわれない, かけ離れた発想。

2. 発想タイプの分類

硬直型 R: 反応が d のみで, 反応数が 3 以下の場合。

流暢型 F: 反応は d のみであるが, 反応数が 4 以上の場合。

柔軟型 X: 反応に m がある場合。

理詰型 M: 反応に o がある場合。

漸進的閃き型 G: 反応に o と e がある場合。

飛躍的閃き型 GJ: 反応に o がなく, e がある場合。

3. タイプ・グループ

タイプ・グループは, 六つの下位テストからなる TCT 創造性検査の結果を, 個々のテストごとではなく総合して評価するために工夫されたものである。

る。6 下位テストは, 大きく言語性 3 テストと非言語性 3 テストに分けられるが, これまでの外部変数との関連についての多く研究結果から, 発想において言語性テストと非言語性テストとの間に一貫した違いは特に認められなかったので, 六つの下位テストの結果を集約して評価するための方法として導入された。六つの下位テストをとおしての発想タイプの出現の仕方により, 以下の五つの群 (グループ) に分けるものである。

群 1: 飛躍的閃き型 (GJ) 1 以上, あるいは漸進的閃き型 (G) 2 以上。

群 2: 漸進的閃き型 (G) 1 あるいは理詰型 (M) 2 以上。

群 3: 理詰型 (M) 1。

群 4: 群 1~3 以外で, 硬直型 (R) 3 以下。

群 5: 群 1~3 以外で, 硬直型 (R) 4 以上。

Table 3-1 基本的構えについての質問項目

[自己肯定]

- 1 私は自分自身が好きである。
- 2 私は生まれてから大事に育てられたと思う。
- 3 私は今の生活で必要とされている (役に立つ) 人間だと思う。
- 4 人から頼りになる人と思われている。
- 5 私は積極的に行動をとるほうである。
- 6 自分の顔や姿に魅力があると思う。
- 7 自分の能力のうち, あるものに自信を持っている。
- 8 私は人前で話すとき, あんまり不安になったりあがったりしない。
- 9 私はたいいていの人ができる程度のことはできる。
- 10 私はミスをしたり, がっかりすることがあっても, 前向きに考えてゆくことができる。

[自己否定]

- 1 私は皆から好かれる人間ではない。
- 2 自分の誕生はあまり歓迎されなかったと思う。
- 3 私は自分自身をダメな人間と思うことがよくある。
- 4 消極的なたちで, 失敗を怖れて物事に手を出さない。
- 5 私は自分のしたことをよく後悔する。
- 6 自分で決断して行動することがなかなかできない。
- 7 自分の容姿には自信がない。
- 8 自信がないので, だいたい人に合わせる。
- 9 友人や同僚と一緒にいることは好きでない。
- 10 あんまり自分自身を尊敬できない。

[他者肯定]

- 1 他の人のやり方や考え方が自分とちがっていても, とくに嫌な気持ちにならない。
- 2 相手を尊重することは, その気持ちを理解することだと思うので, 努めて実行している。
- 3 私は基本的には人を信用するほうである。
- 4 子どもを含めて, だれでも自分の意見を持つ権利があると思う。
- 5 人々が自己主張したり, 経済的に豊になることはよいことだと思う。
- 6 私はたいいていの人とうまくやっていける。
- 7 他の人の生活が順調にいつているとき, いいことだと喜んであげられる。
- 8 嫌いな人とも, 一緒にうまく仕事はできる。
- 9 人はみな自分で物事を決める権利があると思う。
- 10 仲間が失敗しても, いつまでも責めるようなことはしない。

Table 3-2 基本的構えについての質問項目

[他者否定]

- 1 私は根本的には人間を信用していない。
- 2 とときどき相手を罵倒したり、やりこめたりすることがある。
- 3 相手が思ったとおりのことをしてくれないと、とても腹が立つ。
- 4 人のいい点よりも、わるい点を指摘するほうである。
- 5 内心では、人を助けることは甘やかすことだから、その必要はないと思ってる。
- 6 自分の考え方ややり方とちがう人は、できれば排除してしまいたい。
- 7 後輩や部下は私に従うのはあたり前だと思う。
- 8 周囲の人に比べ、私の他人に対する評価は厳しい。
- 9 私はあまり人を褒めないほうである。
- 10 私には、人を利用して自分の立場や仕事をよくしようという傾向がある。

※長谷川ほか(1999)から引用。

Table 4 ユーモア志向尺度の質問項目

[遊戯的ユーモア]

- 1 単純でわかりやすいユーモアが好きだ。
- 2 もっと人を笑わせたい。
- 3 人のものまねを見るのが好き。
- 4 だじゃれを言うのが好きだ。
- 5 ささやかな日常をおもしろく描いた漫画が好きだ。
- 6 人間くささのある笑い話や、ユーモアが好きだ。
- 7 ドタバタな漫画やお笑い番組が好きだ。
- 8 もっと笑いたいと思うことがある。

[攻撃的ユーモア]

- 1 笑いには多少毒があったほうがおもしろい。
- 2 友人を軽く皮肉ったりして楽しむことがある。
- 3 過激な冗談が好きだ。
- 4 ブラックユーモアが好きだ。
- 5 きついことを言って人を笑うのは嫌いだ。※
- 6 変っている知人の話をよく笑いのタネにする。
- 7 人を傷つけるような笑いは嫌いだ。※
- 8 まじめな話をよくチャカす。

※印は、逆転項目である。

※上野(1992)より引用。

以上の中で群1が最も課題の枠組みにとらわれない柔軟な発想ができ、群5が最も枠組みにとらわれた発想をしやすいということになる。

質問紙：1. TAOK (TA and OK positions の略)のうちの基本的構えを測定する尺度 (OK グラム)を使用。これは交流分析における基本的構えの考え方にに基づき、杉田他(1980)が開発したものである。自己肯定、自己否定、他者肯定、他者否定の四つの尺度から構成されている。各尺度の具体的な質問項目については、長谷川他(1999)によった。質問項目は Table 3-1 および 2 に示した。

2. ユーモア志向尺度 研究Ⅰでは、自己や他者を攻撃するための攻撃的ユーモア志向尺度と自己や他者を楽しませるための遊戯的ユーモア志向尺度の2

尺度を使用。具体的な質問項目については、上野(1992)によった。なお、質問項目の内容を Table 4 に示した。

採点：基本的構えの各尺度は、各10項目で構成されており、各項目について「あてはまる」、「どちらともいえない」、「あてはまらない」の3件法で回答してもらい、それぞれ2点、1点、0点として得点化し、各尺度の合計点を算出した。また、ユーモア志向尺度は、攻撃的ユーモア志向尺度および遊戯的ユーモア志向尺度とも8項目で構成されており、各項目に対して、「あてはまる」、「ややあてはまる」、「どちらでもない」、「あまりあてはまらない」、「あてはまらない」の5件法で回答してもらい、それぞれ5点～1点として各尺度の合計点を算出した。ただ

し、攻撃的ユーモア尺度の項目中の逆転項目については、1～5点として採点した。

宮戸ほか(1996)によれば、遊戯的ユーモア志向も攻撃的ユーモア志向のいずれも、どのような出来事にも楽しもうとする姿勢があるという。

手続き：TCT 創造性検査 6 テストから導き出されたタイプ・グループと基本的構え尺度およびユーモア志向尺度との関連を明らかにするため、まず群 1 から群 5 までの全体で基本的構えおよびユーモア志向尺度の得点に違いがみられるかどうかについて、統計的検定を行い、有意差が生じた場合に各群間での差の検定を行うこととした。

結 果

Table 5 にタイプ・グループごとの基本的構えおよびユーモア志向尺度の平均値、標準偏差を示した。群 1 は 1 名しか出現せず、他の群との比較はできない。群 1 を除く群 2 から群 5 について平均値をみると、自己肯定については、群 2 から群 5 にいくに従って、平均値が下がっており、柔軟な考え方ができにくい人ほど、自己に対する肯定的な構えが低いという傾向が示されている。逆に自己否定の平均値は、群 2 から群 5 にいくに従って、平均値が上っており、柔軟な考え方ができにくい人ほど自己

に対する否定的な構えが高いという傾向になっている。他者肯定では、自己肯定や自己否定の場合のような一貫した傾向はみられない。最も平均値が高いのは群 3 で、続いて群 2、そして群 4 となっている。群 5 は最も平均値が低く、しかもその差が他の群と比べて大きいことが特徴である。他者否定については、やはり一貫した傾向はみられないが、群 5 が最も平均値が高くなっており、他者否定の構えが他の群よりも高いという傾向にある。

ユーモア志向尺度については、攻撃的ユーモアでは、群 2 が最も高く、群 5 が最も低いものの、群間の差は小さい。遊戯的ユーモアについては、群 2 から群 4 の間で差は小さく、群 5 の平均値が低いことが特徴である。

群 1 の 1 名を除く群 2 から群 5 までの 268 名での基本的構え尺度およびユーモア志向尺度の得点の差については、Kruskal Wallis の検定により検討した。その結果、群 2 から群 5 までの全体で、自己肯定 ($p < .007$)、他者肯定 ($p < .006$)、遊戯的ユーモア ($p < .010$) で有意な差が生じた。そこで各群ごとの差について、Mann-Whitney の検定により検討を行った。その結果、自己肯定の得点において群 2 が群 4 および群 5 に対して有意に高かった ($p < .010$ 、

Table 5 タイプ・グループの各群の基本的構えおよびユーモア志向の平均値

タイプ・グループ	基本的構え				ユーモア志向	
	自己肯定	自己否定	他者肯定	他者否定	攻撃的ユーモア	遊戯的ユーモア
群 1 1 名 平均値 (標準偏差)	16.0 (-)	3.0 (-)	19.0 (-)	2.0 (-)	19.0 (-)	34.0 (-)
群 2 77 名 平均値 (標準偏差)	10.6 (3.3)	10.3 (3.2)	15.4 (2.2)	6.1 (3.4)	22.8 (5.1)	30.3 (4.8)
群 3 99 名 平均値 (標準偏差)	10.1 (3.3)	10.9 (3.2)	16.0 (2.3)	5.4 (2.9)	22.0 (5.8)	31.6 (5.0)
群 4 83 名 平均値 (標準偏差)	9.3 (3.4)	11.2 (3.5)	15.2 (2.8)	5.6 (3.9)	21.4 (5.0)	30.4 (5.9)
群 5 9 名 平均値 (標準偏差)	6.3 (4.6)	13.0 (3.9)	13.0 (2.6)	7.9 (2.3)	21.4 (5.4)	26.0 (4.5)
全体 269 名 平均値 (標準偏差)	9.9 (3.5)	10.8 (3.4)	15.5 (2.5)	5.7 (3.4)	22.0 (5.4)	30.6 (5.3)

$p < .011$)。また、群3も群5に対して、自己肯定で有意に高かった ($p < .019$)。他者肯定の得点では、群3が群2および群5に対して有意に高かった ($p < .047, p < .002$)。また、群2は、群5に対して有意に高かった ($p < .011$)。さらに群4は、群5に対して有意に高かった ($p < .030$)。

遊戯的ユーモアの得点においては、群3が群2および群5よりも有意に高かった ($p < .044, p < .004$)。また、群2は群5に対して有意に高かった ($p < .018$)。さらに群4は、群5に対して有意に高かった ($p < .013$)。

以上の結果から、群2から群5の中で、特に思考の柔軟性において他の群に比べて劣ると考えられる群5が、自己肯定や他者肯定そして遊戯的ユーモア志向の得点において、他の群よりも低いということが明らかとなった。

考 察

水野他(1982)は、同一被験者に基本的構え4尺度とY-G性格検査、EPPS性格検査等を実施し、それらとの関連から4つの基本的構えそれぞれの特徴を挙げている。以下にその要点と考えられる部分を示す。

自己肯定：この尺度が高い場合には、情緒的に安定しており、活動性、持続性ともに高い。

自己否定：この尺度が高い場合には、情緒的に不安定で全般に適応がよくない。

他者肯定：この尺度が高い場合には、攻撃的ではなく対人接触を好む。自分をあまり主張せず、適応もよい。

他者否定：この尺度が高い場合には、情緒的に不安定で自己主張が強い。

以上の説明によれば、群5の人たちは、情緒的な安定度や対人接触の点で、他の群の人たちよりも不足しており、そのために努力が必要な人たちと言える。すでに説明したように群5の人たちは、さまざまな問題解決状況におかれた場合に、いろいろな観点からものごとを考えるという思考の柔軟性が不足するために対人関係で自己肯定感や他者肯定感を十分に持てずにいるということが推測される。

群5の人たちは、他の群の人たちに比べて遊戯的ユーモアを好むという点でも低かった。遊戯的ユーモアは、上野(1992)によれば、自己や他者を楽しま

せるために志向されるものである。群5の人たちは自分の置かれた状況に対して、余裕をもってユーモアで対処する、すなわち、少し角度を変えてものごとを考えたり、みたりするという傾向が、他の群の人たちに比べて少ないと考えられる。遊戯的ユーモアへの志向が他の群の人たちよりも少ないということの背景には、柔軟にものごとに対応できない思考やものの見方の硬さがあるものと推測される。このような硬直した思考やものの見方を柔軟にすることで、対人関係をよりよいものに改善したり、ユーモアに対する志向を高めたりすることができるものと考えられる。

研 究 II

研究Iの一部で、TCT創造性検査から導き出されるタイプ・グループとユーモア志向尺度との関連について取り上げたが、研究Iの時点で筆者らが把握していなかったユーモア志向尺度の下位尺度として、宮戸ほか(1996)が新たに支援的ユーモア志向尺度を開発していたことが明らかとなった。宮戸他は、この支援的ユーモア志向尺度が、研究Iで取り上げた二つのユーモア志向尺度とは違い、精神的な健康の維持に大きく関連することを明らかにしている。支援的ユーモアを志向し、表出することにより、ネガティブ事象に対する耐性を強め、結果として抑うつ状態になることが防げるというのである。研究Iで取り上げた遊戯的ユーモアや攻撃的ユーモアにおいては、抑うつを抑制する働きはなく、ネガティブ事象に対する態度や感情にも影響を与えないという。また、この支援的ユーモア志向は、先に取り上げた遊戯的ユーモア志向や攻撃的ユーモア志向と同様にどのような出来事に対しても楽しもうという享楽志向があるが、同時に自己客観視や自己洞察を伴う点で遊戯的ユーモア志向や攻撃的ユーモア志向とは区別されるという。そこで本研究では、新たにこの支援的ユーモア志向尺度を加えた三つのユーモア志向尺度とTCT創造性検査により評価される思考の柔軟性との関連について検討する。

目 的

同一被験者にTCT創造性検査と攻撃的ユーモア志向尺度、遊戯的ユーモア志向尺度、そして支援的ユーモア志向尺度の3尺度を実施し、五つのタイプ・グループとユーモア志向3尺度との関連につ

Table 6 支援的ユーモア志向尺度の質問項目

1	ちょっと淋しそうな人がいると冗談などを言って笑わせたい。
2	人をなぐさめるために、自分の失敗をおもしろおかしく語ることがある。
3	友人を励ますために笑わせようとする。
4	人を救うようなユーモアが好きだ。
5	嫌なことがあっても笑い飛ばせる。
6	あわてたり、騒いだりしている自分をこっけいに感じて人と笑うことがある。
7	人がけんかを始めそうなとき、ユーモアを使って仲をとりもつ。
8	気がめいるようなときでもユーモアで自分を励ます。

※上野 (2003) より引用。

Table 7 タイプ・グループ各群のユーモア志向 3 尺度の平均値

タイプ・グループ	ユーモア志向 3 尺度		
	攻撃的ユーモア	遊戯的ユーモア	支援的ユーモア
群 1 9 名 平均値 (標準偏差)	25.0 (7.8)	33.2 (4.3)	30.2 (4.6)
群 2 11 名 平均値 (標準偏差)	24.0 (5.4)	31.7 (4.5)	29.2 (6.4)
群 3 20 名 平均値 (標準偏差)	23.1 (4.3)	31.4 (4.7)	28.2 (6.1)
群 4 12 名 平均値 (標準偏差)	21.3 (4.3)	28.0 (4.3)	25.8 (3.5)
群 5 2 名 平均値 (標準偏差)	18.0 (1.4)	25.5 (0.7)	22.5 (2.1)
全体 54 名 平均値 (標準偏差)	23.0 (5.2)	30.8 (4.7)	28.0 (5.5)

いて明らかにすることを目的とする。

方 法

被験者：東京都内の専門学校健康心理学科 3 年生および介護福祉学科 1 年生，男女合計 54 名。被験者は、研究 I と同じく人間関係で悩んだり、問題を抱えやすい青年期にある人たちであるため、協力を依頼した。被験者には、研究に対する協力については、任意であること、個人情報統計的処理を施すので保護されること、そして結果については、学会や論文等で発表させていただくことを説明の上、協力を依頼した。調査は、2006 年 10 月に実施した。

検査課題：TCT 創造性検査。質問紙：ユーモア志

向 3 尺度。なお、Table 6 に支援的ユーモア志向尺度の質問項目を示した。

結 果

Table 7 にタイプ・グループの群 1 から群 5 までのユーモア志向 3 尺度の平均値および標準偏差を示した。

攻撃的ユーモアの全体の平均値に対する各群の平均値をみると、全体の平均値よりも高いのは、群 1 から群 3 までであり、群 4 と群 5 は平均値より低い。遊戯的ユーモアの平均値についても同様に群 1 から群 3 が全体の平均値よりも高く、群 4 と群 5 が全体の平均値よりも低い。支援的ユーモアについても、攻撃的ユーモアおよび遊戯的ユーモアと同様で

あった。群4および群5が、すべてのユーモア志向尺度において、群1から群3よりも低いという結果であったが、Kruskal Wallisの検定では有意差は生じなかった。被験者数が十分でなかったことによるものと考えられる。そこで各群ごとにMann-Whitneyの検定により有意差がみられるかどうか検討した。その結果、より柔軟に発想できると考えられる群1および群2、群3との間では、三つの志向尺度のすべてにおいて有意差は生じなかった。一方、群1は群4よりも、遊戯的ユーモアおよび支援的ユーモアの両方において、有意に高かった($p < .021$, $p < .029$)。群1は同様に群5に対しても遊戯的ユーモアおよび支援的ユーモアにおいて、いずれも有意に高かった($p < .045$, $p < .033$)。

考 察

群4と群5は、群1から群3に比べるとユーモア志向の3尺度すべてにおいて平均値が低く、思考の柔軟性に足りない人たちが、ユーモアへの志向が乏しいという傾向が示された。三つのユーモア志向の中で支援的ユーモアに対する志向が、すでに指摘したように精神的健康の維持と関係が深いとされるが、群1と群4および群5との間では、遊戯的ユーモアと支援的ユーモアの両方で有意な差が生じており、遊戯的ユーモアと支援的ユーモアとの違いについては、明らかにできなかった。いずれにしても、思考の柔軟性の高い人たちがそうでない人たちに比べて、自己や他者を楽しませようとする志向をもつと同時に自己を客観視し、洞察しようとする傾向が強いと言うことができよう。こうした特性が精神的健康の維持にも有効に機能するものと推測される。

総 合 考 察

研究Iにおいては、思考の柔軟性において優れる人がそうでない人よりも自己肯定において有意に高く、既に指摘したように情緒的に安定しているということが示唆された。また、他者肯定においても思考の柔軟性に優れる人がそうでない人よりも有意に高かった。思考の柔軟性に優れる人は、自己肯定、他者肯定ともに高く、対人接触を好み、対人関係上の適応がよいということが示唆された。一方、ユーモア志向尺度の遊戯的ユーモア志向においても、思考の柔軟性に優れる人が、そうでない人よりも有意に高かった。思考の柔軟性に優れる人がそうでない

人よりも気持ちの上で余裕といったものがあり、自己や他者を楽しませる遊戯的ユーモアへの志向が強いと考えられる。

研究IIでは、ユーモア志向の3尺度とタイプ・グループとの関連のみについて検討した。研究Iと同様に攻撃的ユーモアの志向においては、思考の柔軟性に優れる人とそうでない人との間で有意差は生じなかった。しかし、遊戯的ユーモアにおいては、研究Iと同様に思考の柔軟性に優れる人がそうでない人よりも有意に高かった。同様に新たに開発された支援的ユーモアにおいても、やはり思考の柔軟性に優れる人がそうでない人よりも有意に高かった。

以上から、思考の柔軟性に優れる人が、そうでない人よりも自己や他者を楽しませるというところの余裕や自己客観視において、上回っているということが示唆されるであろう。

研究Iおよび研究IIの結果から、思考の柔軟性と良好な人間関係を維持することとの間には重要な関連のあることが示唆されたと考える。

ただし、本研究の研究Iと研究IIとでは、タイプ・グループの群1の出現率が大きく違った。研究Iでは、全体のわずか0.4%に止まるのに対し、研究IIでは16.7%にも上っている。そのため研究IIでは、群2や群4の出現率が研究Iよりもそれぞれ8%程度少なくなっている。また、研究Iでは、より思考の柔軟性が高いと考えられる群2の方が群3よりも他者肯定および遊戯的ユーモアにおいて有意に低いという結果になり、今後更なる検討の必要性が示唆された。しかし、全体的にみて、少なくとも思考の柔軟性の乏しい人たちが、より柔軟な人たちに比べて良好な人間関係を維持していくための指標において、有意に低いということが明らかになったと言えよう。

今後の課題としては、以下のようなことが挙げられる。第一にさまざまな被験者を対象として、群1から群5の出現率と基本的構えおよびユーモアへの志向との関連を検討すること、第二に長谷川(1999)らは、基本的構えにおける他者肯定において男子よりも女子のほうが有意に高く、他者否定においては、逆に女子よりも男子のほうが有意に高いという結果を示しているので、思考の柔軟性と基本的構えやユーモアへの志向との関連における男女差について明らかにすることである。以上の二つが検討課

題である。

引用文献

- D'Zurilla, T. J. 1986 *PROBLEM-SOLVING THERAPY-A social Competence Approach to Clinical Intervention*. Springer Publishing Company (丸山晋監訳 問題解決療法—臨床的介入への社会的コンピテンス・アプローチ 1995 金剛出版)
- Guilford, J. P. 1959 *Traits of creativity*. In H. H. Anderson (Ed.), *Creativity and its cultivation*. New York: Harper. 142-161.
- 伊賀憲子・久米 稔・黒岩 誠・高野隆一・寺澤美彦・内藤美智子・三島正英 2000 TCT 創造性検査 早稲田大学創造性研究会.
- 久米 稔 2000 創造性の評価基準について 1999 前野書店.
- 長谷川洋子・橋本 宰・佐藤 豪 1999 対人関係における基本的構えが摂食障害傾向およびボディ・イメージの歪みに与える影響 健康心理学研究, 12(2), 12-23.
- 水野正憲・杉田峰康・新里里春・岡野一央博 1982 TAOK の信頼性・妥当性の研究 交流分析研究, 7(1), 28-46.
- 宮戸美樹・上野行良 1996 ユーモアの支援的効果の検討—支援的ユーモア志向尺度の構成— 心理学研究, 67(4), 270-277.
- 高野隆一 1989 創造的思考の評価基準 心理学研究, 60(1), 17-23.
- 高野隆一・久米 稔・成田 猛・寺澤美彦・黒岩 誠・伊賀憲子 2002 創造性と健康 (4)—創造性と基本的構え及びユーモアの好みとの関連性— 日本健康心理学会第 15 回大会発表論文集.
- 高野隆一・久米 稔・成田 猛・寺澤美彦・黒岩 誠・伊賀憲子 2003 創造性と健康 (5)—TCT 創造性検査と基本的構え及びユーモアの好みとの関連性— 日本健康心理学会第 16 回大会発表論文集.
- 高野隆一・久米 稔・成田 猛・寺澤美彦・黒岩 誠・伊賀憲子 2004 創造性と健康 (6)—発想タイプと精神的健康との関連性— 日本健康心理学会第 17 回大会発表論文集.
- 寺澤美彦・久米 稔・成田 猛・高野隆一・伊賀憲子・内藤美智子 2003 MSC (創造的構え) テスト改訂の試み (7) 日本応用心理学会第 70 回大会発表論文集.
- 上野行良 1992 ユーモアをもつ 松井豊編 対人心理学の最前線 161-168 サイエンス社.
- 上野行良 2003 ユーモアの心理学 サイエンス社.

(受稿: 2008. 5. 20, 受理: 2009. 1. 20)